高崎経済大学論集　第48巻　第１号　2005　45頁～54頁

人格概念の原初性と能力としての想起

―人格の同一性を問うということ―

福　田　敦　史

The Primitiveness of the Concept of a Person and Ability to Remember

―Examining the Identity of a Person―

Atsushi FUKUDA

Abstract

When we examine the concept of a person, one must keep in mind that the concept is a primitive one. This "primitiveness" means here, as Strawson argued in his *Individuals*, that the concept of a person is prior to the concept of a mind and to the concept of a body. The same thing could be said to the argument of the identity of a person.

In the case of the philosophical problem of personal identity, memory (or consciousness) is regarded as one representative criteria of its identity. And it has been argued that the question is whether specific memory, mental or brain state can be ascribed to a particular person or not. Yet, it is inappropriate to treat memory just as an ascription of some mental *state*, and not from the perspective that memory is our *ability* of recollection (remembering). For a person, who has the mental and physical aspect, remembering is the capability to reconstitute the identity between the existent that has been existed with his career as a person, and past himself within this career.

１．はじめに

「人格の同一性の問題（the problem of personal identity)」というものが、哲学において通常どのようなものとして立てられているかというと、例えば、「ある時に人格として同定された人物と、別の時に人格と同定された人物が、同じ人格であるとするための必要十分条件に関する考察[1]」と

いった定式化が代表的なものになろう。これを、もう少し噛み砕いて述べるならば、人格が同一であることの基準はどのようなものなのか、ある時点における存在者と、別の時点における存在者が、同一の人格であるということはどのようにして言うことができるか、といったものが人格の同一性の問題である、ということになる。

さて、「人格の同一性の問題」は一般に以上のような問いとして立てられるものなのだが、私は以前からこうしたタイプの問題設定に、ある種の違和感のようなものを覚えていた。というのも、こうした問題設定というものが、なにか反転したもののように感じられたからである。

私にとって「人格の同一性の問題」とは、例えば「５年前の人格と、現在の人格とが、同じであると言えるだろうか、その基準があるとしたら何か」といったものではなく、「論理的には別の人格である可能性をいくらでも考えることができるのにもかかわらず、なにゆえ同一の人格であるとみなしてしまうのか」というものである。換言すれば、私にとってより枢要な人格の同一性の問題とは、「昨日の人格と今日の人格が同じであるとは、いったいどういうことなのか」というものなのである。このようなものは、人格の同一性の問題についての異なるタイプの問題設定、もしくは、人格という概念はどのようなものであるのか、と人格概念を問うことにつながるものであるといえよう。

本論文は、『個体と主語』においてストローソンが述べている「人格という概念は原初的（primitive）である」という考えを巡るものになる。まずは、前半の三節を費やして、人格概念の原初性ということについて概観的なことを述べる。その際、ストローソンの主張に対する批判も紹介することにする。後半の節では、人格概念の原初性ということを念頭においたうえで、記憶・想起というものをどのように捉える必要があるか、という問題を扱うことにする。

ここであらかじめ述べておこうと思うが、私は決して、人格の同一性の基準を問う考察が無意味だと考えているのではない。ただ、本論文では、どのような問題関心によるものであれ、人格という概念を考察する際には、その概念が私達にとって原初的であることを忘れてはならないということ、そして、その際、記憶や想起というものを、これまで人格の同一性の議論で論じられてきたものとは、異なる観点から捉えなければならないということを論じようと思うのである。

１．人格概念の原初性

１．１．原初性についてのストローソンの議論

前節で触れたように、ストローソンは『個体と主語』において、人格という概念は原初的なものである、ということを述べている。この節では、すでによく知られているものではあるが、人格概念についてのストローソンの議論を、簡単に振り返っておくことにしよう。

まず、ストローソンは、次のようなふたつの問――しかしそれぞれが独立の問ではなく、相互に不可分になっている問――を立てることで人格についての議論を始めている。

われわれは、なぜ、あるひと（one）の意識状態を、そもそも何かに帰属することができるのかという問だけではなく、なぜそうした意識状態が、ある物体的特徴（corporeal characteristics）や身体的状況（physical situation）が帰属されるものと、まさに同じものに帰属されるのかという問をも有している。これらの問についての答えが、相互に独立しているものとみなされてはならないのである[2]。

ここでストローソンが念頭に置いている論敵にはふたつあり、ひとつは、人格概念についてのいわゆるデカルト主義的な考えであり、もうひとつは「無所有者説（no-ownership theory）」ないし「無主体説（no subject theory）」と呼ばれる考えである。

まず、デカルト的、ないし、デカルト主義的とみなされる考え方によれば、このストローソンからの引用における後者の問い、つまり、「ある意識状態が、身体的・物体的特徴を持つものになぜ帰属されるのか」という問いは生じる余地がないとみなすことができる。なぜならば、ストローソンの解釈に従うと、デカルト主義的な考えによれば、意識状態が帰属されるものと、身体的・物体的特徴とが帰属されるものとは、異なるタイプの実体であり、それら両者が同じものに帰属されるというのは「言語的な幻想」にすぎない、ということになるからである[3]。

一方の無主体説にとっては、前者の問い、すなわち、「ある意識状態が何かに帰属することができるのはなぜか」という問いが生じる余地はない、とされる。この無所有者説ないし無主体説は、ここでのストローソンにとっては、ある時期のウィトゲンシュタインやシュリックが抱いていたと見なせる説ということなる。他に含められるものとしては、アンスコムの議論も有名なものとして挙げられるであろうし[4]、こうした論者を含め多くの人が挙げる、リヒテンベルクのアフォリズムにも現れているものである[5]。

とはいえ、どのようなものがほんとうにこの説に該当するものなのか考え詰めようとすると、詳細な検討を要することになるので、ここでは、ウィリアムズの規定を挙げて先に進むことにしておこう。それによれば「意識状態は、本来的に何か主体を持つわけではなく、さまざまな経験の集まりが、さまざまな身体の物体的状態に因果的に依存している、という単なる偶然的な事実があるにすぎない[6]」と考える立場というものになる。

ここでの議論にとって重要なことは、これらデカルト主義的な考えであれ、無所有者説であれ、どちらも意識的な述語と身体的・物理的述語の双方が帰属するような主体・人格というものを認めない、という点である。

こうした考えに反してストローソンが提示している人格という概念は、次のようなものになる。

人格の概念ということで私が意味しているのは、意識状態を帰属する述語と、物体的身体的特徴や身体的な状況などを帰属する述語、これら双方を等しく単一のタイプの、単一の個体に帰属することができるような存在者のタイプの概念である[7]。

このような人格に適用されるものが、有名なP述語というものになるわけである。「10ストーンの重さを持つ」や「応接間にいる」といったM述語だけではなく（これらは物体にも帰属することができる述語とされるわけだが)、「痛い」とか「神を信じている」「散歩している」といったP述語を（もちろん、P述語には他にもたくさんあるわけだが）帰属することができるもの、それがストローソンによれば人格とされる。

ストローソンにおいて「人格概念が原初的である」というときにまず意味されていることは、人格概念は、意識や身体という概念に対して原初的である、ということであり、「それ[人格概念は原初的であるという考え]が実際に意味していることは、人格の概念は、一側面だけのものがふたつ組み合わさった概念ではなく、二つの側面をもつひとつのものの概念である[8]」ということなのである。すなわち、それぞれ独立に、意識や身体というものを考えることができるわけではなく、人格という概念が先行し、かならず人格の意識、人格の身体、と考えられなければならないということである。

１．２．ストローソンの議論への批判

こうしたストローソンの考えに対しては、これまでにもさまざまな批判がなされている。

例えば、さきほど触れたウィリアムズは、ストローソンによるM述語とP述語の区別が曖昧であり、人格に行為を帰属させるような多くの述語が、単なる機械にも適用できる、と指摘している[9]。まず、この批判を「料理をつくる」という語をとりあげて説明してみよう。

「料理をつくる」という語は、「人間が『料理をつくる』」、「私の妻が毎朝『料理をつくる』」というように、当然人格とみなされる存在者に対して用いることができる。その一方で、「フードプロセッサが『料理をつくる』」「この電子レンジが毎朝『料理をつくる』」というように、機械に対しても帰属することができる。このことは、「料理をつくる」という語が、M述語とP述語のどちらに属するかの区別は、そのままでは曖昧であることを示している。このような曖昧さがみられる述語が、他にも数多くあることは容易に理解されることであろう。

だが、このような批判に対して、ある述語がP述語かM述語か不明瞭な場合があることを認めたうえで、人格に適用させるものとしてのP述語の基準を提示することは可能である、という反論があるかもしれない。すなわち、人間に帰属するときとフードプロセッサに帰属するときとでは、同じ「料理をつくる」という語であっても、その意味は異なっているのだと反論するのである。しかし、ある述語がP述語かM述語かの判別が曖昧な際に、その意味の違いを事前に知ることができるためには、本来ストローソン自身が批判していたはずのデカルト的な区別をひそかに持ち出し、意識状態が帰属されるようなデカルト的な精神というものを措定しなければならない、ということに陥ってしまうだろう。

また、ストローソンのP述語についての議論は、人格の基準、あるいは人格の同一性の基準を求めているものにとっては、さほど重要な意義を持たないと受け取られるかもしれない。というのも、

もし、ストローソンが述べていることが、「われわれがそれに対してP述語を帰属することができるものが人格なのだ」ということなのだとするならば（この後で、私はストローソンの主張の意図はこうした定義的なものではない、ということに触れるが）、これはどの存在者に対してP述語を帰属することが適当なのかをすでにして知っているということであり、このことはつまり、どの存在者が人格であるのかすでにして知っている、ということになってしまうのである。ストローソンの議論はいうなれば循環的なものとなっており、人格概念についての有効な適用基準を求めているものにとっては、その概念の適用根拠を与えてくれるものにはなっていないのである[10]。

ストローソン自身も、P述語の適用基準に関して念頭においている問題というものはあり、それは例えば次の文に明瞭に現れている。

> これら[Ｐ述語]の特性にとって本質的なことは、一人称的帰属用法と三人称的帰属用法の双方を持つということであり、自己帰属の場合には、主体のふるまいについての観察に基づかずに帰属することができ、他者帰属の場合には、ふるまいの基準に基づいて可能だということである[11]。

この個所で述べられていることは、P述語の帰属のなされ方にどのような特徴があるか、という問題に関しては非常に重要な論点なのだが、そもそもどのような存在者にP述語を帰属することができるのか、という問題についての「答え」を求めているものにとっては、さしたる意味はないものかもしれない。なぜなら、一人称帰属と三人称帰属の場合で、それが観察に基づいてなされるのか否かという非常に重要な差異があることは確かなのだが、どちらにしても、その帰属する相手が人格であることをすでに知っていることになるからである。つまり、自己帰属であれば、観察に基づかずに、自分自身がすでに人格であることを知っていることになるわけであり、他者帰属の場合には観察に基づいて帰属するということは、どのようなふるまいが人格としてのふるまいなのかをすでに知っている、ということになるわけである。

さらには、本論分で扱うことはしないが、例えば、パーフィットのように、人格という概念の重要性を否定する論者からしてみれば、ストローソンのような議論は、そもそもあまり有益なものとは映らない、ということになるのかもしれない[12]。

１．３．解明としての人格概念の原初性

確かにストローソンは、人格の同一性という問題について、やや安易に考えていたふしがあるのだが[13]、それ以上に「人格という概念が原初的である」という考えに関して、当のストローソン自身が気づいていなかった重要性というものがあったように思われる。そして、その重要性は、ストローソン以上に、他のさまざまな論者によって、いろいろな角度から明らかにされてきたものなのである[14]。

例えば、「人格が原初的である」というストローソンの主張に関する次のようなウィギンズの指摘は示唆的であると思われる[15]。先に本論文でも『個体と主語』から引用した「人格とは、意識状態を帰属する述語と、身体的特徴や物体的な状況などを帰属する述語、これら双方を等しく単一のタイプの、単一の個体に帰属することができるような存在者のタイプの概念である」という個所にふれ、ウィギンズは、これをストローソンによって提起された人格の定義として理解してしまうのは、ストローソンに対する「ひどい仕打ち（disservice）」であるとしている。

ウィギンズによれば、ストローソンによる人格概念の原初性という指摘は、決して定義的なものではなく、さらなる「解明」としての身分を持つものであるということ、そして、人格が何であるかすでに知っている私たちに、私たちが知っているのは何であるのか思い起こさせてくれるような「リマインダー（reminder）」としての身分を持つものだ、とされるのである。

ここでウィギンズが用いている「解明（elucidation）」という概念は、ウィトゲンシュタイン的な意味でのそれであることに注意しなければならない。『論理哲学論考』において、原子記号の意味について述べられているところで、この解明という概念についてふれられているので、これも引用しておこう。

> 原子記号の意味は解明（Erläuterungen; elucidations）によって明らかにされうる。解明とは、その原子記号を命題において用いることである。それゆえそれらの記号の意味がすでに知られているときにのみ、解明は理解されうる[16]。

確かに、私たちは人格という概念に関する、絶対的で決定的な定義や基準を手にしているわけではない。また、人格概念の帰属に関して境界事例とでもよべるケースがあることも事実であるし、人格概念の適用に関して誤りを犯すこともきっとあることだろう。しかし、ある概念の使用を私たちが誤ることがあるとしても、そのことが、すぐさまその概念の客観性を否定するわけではない。しかも、私たちは実際の現実の場面において、人格という概念を了解し、人格と言う概念を用いているわけである。まさに「人格についてのいかなる理論も、お互い同士を人格とみなすわれわれの実践を捉えているのでなければ、擁護に値しないだろう[17]」といえるのではないだろうか。

２．能力としての想起

２．１．人格概念は原初的であるという観点からみた時の記憶・想起

以下では、「人格という概念は原初的である」という点を念頭においたうえで、人格の同一性について考察する際の、記憶ないし、想起の取り扱いの問題についてふれたいと思う。

人格の同一性の基準が問われる際、一般的に、身体説というものと、意識説ないし記憶説というものとの大きく分けてふたつの立場を挙げることができる[18]。つまり、ある人格の通時的な同一性

を調べる基準として、その人格の身体的・物理的な同一性を掲げるのか、あるいは、記憶や性格、意志といったものを含めた心理的な同一性を掲げるのか、という立場の違いである。このような、人格の同一性の基準は、身体なのか意識なのかという立場の対立があるからこそ、ストローソンはこれら身体と意識に対して概念的に先行するものとして、人格概念の原初性を主張する必要性をみていたわけである。

私は、これまでにも述べてきたように「人格という概念は原初的である」というストローソンの主張に賛同する。そのうえで、あえて、人格の同一性問題における記憶ないし想起の重要性ということを主張したい。しかし、もちろん、記憶を重要視するといっても、その意味合いや強調点は、これまで人格の同一性の問題において主張されてきた記憶説とは異なるものとなる。私が主張したいことは、単なる心的状態や意識内容という点からみる記憶ではなく、能力としての記憶、能力としての想起という観点からの記憶の重要性ということなのである[19]。

人格の同一性問題において記憶説が取り上げられるとき、しばしば、ある記憶内容や心的内容、あるいは意識内容といったものを個別に取り出し、それを当該の主体が有しているかどうか、帰属できるかどうか、といったかたちで考察される。こうした取り扱いは、私たち人間の総合的な能力のうちに包含され、そのなかで重要な役割を果たしている能力として記憶を捉えるのではなく、単なる心理的な一作用としてのみ記憶を捉える仕方でしかない、ということができるであろう。「帰属されるべき記憶内容」や「帰属されるべき脳状態」といった表現に象徴されるような記憶の捉え方は、記憶を能力として捉えるのではなく、単にある心的状態をある主体に帰属出来るか否かを計るための目印やサインとしての捉え方でしかないように思われる。そして、目印やサインとしてのものは、一見すると（apparently）記憶を取り扱っているように見えながらも、それは能力としての想起、私たちが実際に有している記憶能力、想起能力とは似て非なるものを扱っている、と言わざるを得ないであろう。

また、これもしばしば見られることだが、人格の同一性が論じられる際に記憶というものが取り上げられると、それがそのまま何やら純粋に意識的なものとされ、そこでは、人格としての身体的な側面など考慮されない傾向があると思われる。特にロック解釈においては――記憶説の立場をとるロックに対して賛意を表するのであれ、批判するのであれ――この傾向が顕著であるように思われる。

しかし、考えてみれば、これは奇妙なことである。私達が想起すること、記憶していることというのは、当然のことではあるが、身体を有した自分が過去において経験したことであるわけである。そうであれば、もし、記憶というものを考える際に身体性というものをまったく排除した仕方で考察するようであれば、それもやはり、表面上は記憶や想起のようなものを取り上げているように見えながらも、実は、私たち人格にとっての記憶や想起を扱っているとはいえない、ということになるだろう。

人格とは、人格としての意識的能力と人格としての身体的能力を携えて存在（exist）し、生存

（survive）してきたものである。このような人格を問題にする際には、その人格がこれまで生きてきたさまざまな「来歴（career）」という観点をはずすことはできない[20]。そして、このことは過去の体験を想いだすという想起においても違いはないのである。想起ないし記憶とは、過去に身体を有した人格が体験したことを想起することなのであり、このことは、ある意識状態や心的内容を現在、ある主体に帰属できるか否か、という問題で解消されることではないのである。

２．２．生存への関心について

最後に、「人格概念の原初性」の重要性について論じている石黒の考察に関して、一点だけ簡単にではあるが検討することにしたい。石黒はハイデガーとサルトルを念頭に置きながら「人格とは何であるかというわれわれの理解にとって、未来への関心、未来の状態との関係が本質的である[21]」ということを述べている。これは人格の同一性の問題をいまのようなかたちで定式化したとされるロックから現代のシューメイカーにいたる人格の同一性の心的基準に関する議論が、意識状態や体験的記憶の単なる所有の問題に関与しすぎてきたことへの批判的な指摘である。

私は、人格の理解という主題において、未来への関心、あるいは「生存への関心（concern to survive）[22]」といったものが重要であることを完全に認める。ただ、そのうえで、人格が未来への関心を持てるためにも、あるいは、未来へと「投企すること（Entwerfen）」ができるためにも、その人格が過去を理解していることが必要であり、自身の体験を想起することが可能であるということが必要なのではないかと考える。そして、もちろんこれは先にも述べたように、単なる意識状態や記憶内容の単なる所有の問題ということではないのである。

石黒による、人格の同一性の議論における記憶の重視への批判というものは、あくまで意識状態や体験的記憶内容の単なる帰属を問題にしてきた傾向に対する批判であり、身体を持ち、時間的な存在者である人格、すなわち、身体をもって世界のうちでこれまで生きてきて、そしてこれからも生きていくであろう人格の、その能力としての記憶・能力としての想起を重視する、という本論文の立場とは、十分に両立するものであると思われる。

まとめ

人格というものを考察する際には、それが原初的な概念であるということを常に念頭に置いておかなければならない。このことは、人格の同一性という問題を考える際であっても同様である。人格に関して、その同一性が問題となるときに記憶が取り上げられる際、しばしば、帰属されるべき記憶内容・心的状態といったかたちで取り出されてしまう。人間の想起能力という観点から捉えられるのではなく、ある心理的な状態のみが切り離されてしまうのである。人格としての私たちの能力である記憶・想起を十全に考察するためには、記憶を単なる心的状態の帰属という観点から検討するだけではあまりに不適切なのである。

意識的な側面と身体的な側面とを不可分なかたちで併せもっている人格にとって、記憶・想起とは、人格としての来歴を伴って生存してきた存在者が、来歴のうちでの自身の存在との同一性を紡ぐ能力なのである。

（ふくだ　あつし・本学非常勤講師）

注

1　Noonan（2003), p.2.
2　Strawson（1959), p.90.
3　Strawson（1959), p.94.
4　Anscombe（1975).
5　"*Es denkt*, sollte man sagen, so wie man sagt：*es blitzt*." Quoted by Parfit（1984), p.517, n. 20. McDowell（1997), p.365を参照。
6　Williams（1961), p.120.
7　Strawson（1959), pp.101-2.
8　Hacker（2002), p.25.またStrawson（1966b）も参照。
9　Williams（1961).
10　このようなタイプの批判を展開する論者のひとりとして、例えばフランクファートが挙げられる。Frankfurt（1971）はその際、まず欲求というものを２つの階層に分ける。そして、人格を持つ人間と動物との区別は、動物は「第一階の欲求（first-order desires)」しか持たないが、人格性を持つ人間は、欲求についてのさらなる欲求という「第二階の欲求（second-order desires)」をも持てる、ということにあるとする。そしてこの第二階の欲求のうち、ある第一階の欲求が特に自分の意志であることを望む様な第二階の欲求を「第二階の意志（second-order volitions)」とよび、この様な、どの欲求を実現すべきか、どの欲求を持つべきかを考慮する第二階の意志を持つものが人格であるとされる。
11　Strawson（1959), p.108.
12　パーフィットによる議論、とりわけ「擬似記憶（quasi-memory)」概念を基にした彼の還元主義的議論に関して、本論文では取り扱わないが、著者は、Evans（1982)、Korsgaard（1989)、McDowell（1997)、Wiggins（1979）；（1992）らによる批判に共感している。
13　Strawson（1966a), p.164n.「人格の同一性というトピックは、最近の哲学において十分に論じられてきた。私はこの問題はすでに理解されたものとみなす」
14　筆者が念頭に置いている論考には例えば、Ishiguro（1972）；（1980), Korsgaard（1989), McDowell（1998), Wiggins（1987）；（1992）といったものがある。
15　Wiggins（1987), p.64.
16　Wittgenstein（1922), 3.263.
17　Ishiguro（1980), p.75.
18　これはあくまで「大きく分けて」みた場合であり、人格の同一性の基準に関する立場には、もちろん、さまざまなものが見られる。とはいえ、本文中で述べた身体説（物理説）と意識説（記憶説）の二つに、最近影響力のある議論が数多く出てきた、生物学的なアプローチである「動物主義（animalism)」を加えた三つが代表的なものである、とは言うことができるだろう。
19　蛇足かもしれないが、ここで「能力としての記憶・想起」といっても、単に「手続き記憶」や「運動技能や習慣の記憶」といったものを念頭においているわけではない。どのような記憶を扱うのであれ、それをある意識状態や記憶内容の帰属という問題のみで考察するのでは、人格の同一性の問題にとっては不十分である、ということがここでの論点である。
20　Evans（1982), McDowell（1997), Wiggins（1992).
21　Ishiguro（1972), p.165.
22　Wiggins（1979).

文献

Anscombe, G. E. M.（1975), "The First Person", in S. Guttenplan（ed.), *Mind and Language*, Oxford University Press, reprinted in her *Metaphysics and the Philosophy of Mind: Collected Philosophical Papers* vol. 2, Blackwell, 1981, pp.21-36.

Evans, G.（1982), *The Varieties of Reference*, Oxford University Press.

Frankfurt, H. G.（1971), "Freedom of the Will and the Concept of a Person", *Journal of Philosophy* 68, reprinted in his *The Importance of What We Care About*, Cambridge University Press, 1988, pp.11-25.

Hacker, P.（2002), "Strawson's Concept of a Person", *Proceedings of the Aristotelian Society*, vol.102, pp.21-40.

Ishiguro, H.（1972), "A Person's Future and the Mind-Body Problem", in W. Mays and S.C. Brown（eds.), *Linguistic Analysis and Phenomenology*, Macmillan, pp.163-178.

――――（1980), "The Primitiveness of the Concept of a Person", in Van Straaten, Zak（ed.), *Philosophical Subjects: Essays Presented to P. F. Strawson*, Oxford University Press, pp.62-75.

Korsgaard, C. M.（1989), "Personal Identity and the Unity of Agency: a Kantian Response to Parfit", *Philosophy and Public Affairs* 18, reprinted in her *Creating the Kingdom of Ends*, Cambridge University Press, 1996, pp.363-397.

McDowell, J.（1997), "Reductionism and the First Person", in J. Dancy（ed.), *Reading Parfit*, Blackwell, reprinted in his *Mind, Value, and Reality*, Harvard University Press, 1998, pp.359-382.

――――（1998）"Referring to Oneself", in L. E. Hahn（ed.), *The Philosophy of P. F. Strawson*, Open Court, pp.129-145.

Noonan, H. W.（2003), *Personal Identity*, second edition, Routledge.

Parfit, D.（1970), "Personal Identity", *Philosophical Review* 80, pp.3-27.

――――（1984), *Reasons and Persons*, Oxford University Press.（『理由と人格』森村進訳、勁草書房、1998年。）

Strawson, P. F.（1959), *Individuals: An Essay in Descriptive Metaphysics*, Methuen.（『個体と主語』中村秀吉訳、みすず書房、1978年。）

――――（1966a), *The Bounds of Sense: An Essay on Kant's Critique of Pure Reason*, Methuen.

――――（1966b), "Self, Mind and Body", *Common Factor*, no.4, reprinted in his *Freedom and Resentment*, Methuen, 1974, pp.169-177.

Wiggins, D.（1979), "The Concern to Survive", *Midwest Studies in Philosophy* vol. 4, reprinted in his *Needs, Values, Truth*, Oxford University Press, 1987; 1991; 1998; 2002, pp.303-311.

――――（1987), "The Person as Object of Science, as Subject of Experience, and as Locus of Value", in A. Peacocke and G. Gillett（eds.), *Persons and Personality*, Blackwell, pp.56-74.

――――（1992), "Remembering Directly", in J. Hopkins and A. Savile（eds.), *Psychoanalysis, Mind and Art-Perspectives on Richard Wollheim*, Basil Blackwell, pp.339-354.

Williams, B.（1961), "Strawson on Individuals", *Philosophy* 36, reprinted in Williams（1973), pp.101-126.

――――（1970), "Are Persons Bodies?", in S. Spicker（ed.), *The Philosophy of the Body*, reprinted in Williams（1973), pp.64-81.

――――（1973), *Problems of the Self*, Cambridge University Press.

Wittgenstein, L.（1922), *Tractatus Logico-Philosophicus*, Routledge.（『ウィトゲンシュタイン全集１』奥雅博訳、大修館書店、1975年。）